

『子どもはみんな問題児。』（新潮社）というインパクトのある本のタイトルに惹かれ、読んでみました。しかも、著者は『ぐりとぐら』シリーズの著者として有名な中川李枝子さん。とても読みやすく、一気に最後まで読んでしまいました。その中から、少し、ご紹介したいと思います。

どの子どもみんなすばらしい問題児

子どもはみんな、問題児というのが私の持論です。

まず自分がそうでしたから。そしておかしいことに、私の周りの大人たちでおおよそ自分はいい子だったという人はいません。

「私っていやな子だった」にはじまって、「ひがみっぽかった」「わがままだった」「よく親が見捨てないで育ててくれたと思うとありがたいわね」などと言います。でもみんなちゃんとりっぴいな大人になっているのでご安心ください。

おりこうさんで、言うことがすぐにわかって、「はいはい」と言う子だったら、つまらないではないですか。育てるほうにとってもおもしろくありません。ロボットではあるまいし、すねたりふくれたりするぐらいのほうが私は好きです。

そもそも子どもというのは欠点だらけで、自分なりにいい子になっていこうと悪戦苦闘のまっ最中なのではないでしょうか。だから純情でかわいいのだと私は思います。（後略）

心を寄せあって楽しめるのは、幼児期まで

子育てには、「抱いて」「降ろして」「ほっといて」。子どもの発達に合わせた三段階があるといえるでしょう。

「抱いて」は幼児期で、ちょうど保育園、幼稚園にきている年頃まで。お母さんにとっていちばん子どもと幸せを共有できる時ではないでしょうか。

お母さんの膝の上で本が読める、この時代を大事にしてもらいたいのは、お母さんの感性が素直にまっすぐ子どもに流れるからです。

おはなしの世界はお母さんの言葉になり、体温になって子どもに伝わっていく。人生で最高に幸せなときだと思います。

グリム童話に「おおかみと七ひきのこやぎ」のおはなしがあります。あの出だしを10人のお母さんが読めば、まさしく十人十色の読み方をするでしょう。

「あるところに子どもが七匹もいるお母さんやぎがいました。そのお母さんやぎが子どもを可愛がることといたら、人間のお母さんと同じでしたよ」

ここが面白いと思うのです。

元気なお母さんもいれば、センチメンタルなお母さんもいる。陽気な人、少し陰のある人もいる。そそっかしい人や、おっちょこちょいもいるし、朗らかでいつも笑っているおかあさんもいる。

それぞれがわが子に対する気持ちを込めて読むでしょう。

「七匹も」のところではびっくりする人もいれば、あきれてうんざりという調子の人もいるでしょうし、淡々と読む人もいます。お母さんがどういう気持ちを持っているかが、みごとに子どもに伝わると思います。

子どもが成長して、「降ろして」といったら、降ろさなくてはなりません。さらに「ほっといて」といったら、見て見ぬ振りをしてなきゃいけない。手出し、口出ししたいのをこらえるのです。

そういう段階が控えているわけですから、大切なことはやはり「抱いて」の時期、言いたいことを全部率直に伝えられるときに伝えておきたいものです。

あとで後悔しないように。

それぞれのお母さんが「おおかみと七ひきのこやぎ」の出だしをどんなふうにお子さんに読んであげているか聴いてみたい気がします。

「抱いて」「おろして」「ほっといて」本当にその通りだなあとと思います。乳幼児期までの「抱いて」の今のこの時期を大切にしてくださいね。そして、ぜひ、お母さん（お父さん）の思いをいろんな絵本に託して、膝の上で一緒に読んであげてください。きっとそれが、「心の支え」となって強く生きていくことのできる人になっていくと思いますよ。